

戦後の広島の様子

私は岡山県倉敷市で生まれましたが、小学校2年生の時に広島市に転居しました。終戦から10年後のことです。

転校した本川小学校は、原爆ドームと川を挟んだ向かいにある地下1階地上3階の当時としては堅牢な建物でした。被爆直後は被爆者の一時的な診療所として使われていたようです。私が転校したころには通常の学校でしたが、ただ地下へ下りる階段には、ロープが張られ「この先入ってはいけません」と張り紙がありました。誰もが怖がって近寄らない階段でした。授業中に壁や天井の一部がボタッと落ちてくることもありました。そこまで手が回らなかったのだと思います。

ある日、ずっと学校を休んでいる男子生徒の家へ担任の先生と二人で行くことになったのです。

太田川のほとりに「原爆スラム」と呼ばれていた地区があり、原爆で家を失った人々が暮らす掘建小屋がたくさん並んでいました。火事になっても次の日にはもう家が建っていると言われるほど、簡単に作られた家でした。その地区の中に彼の家があり、私は何となく足を踏み入れるのが怖かったのを覚えています。

彼の家では母親が病気で寝ており、小学2年生でありながら彼は大事な働き手だったので。本当は学校に行かなければならないけれど、行けない事情を先生は理解していて、「来られるようになったら来るんだよ。待っているからな。」と声をかけられました。

ずっと後になって、先生がなぜ転校して間もない私を連れて行かれたのか、わかったような気がしました。この場面は私にとって忘れられない記憶で、写真のように私の頭の中に残っています。

当時の広島には今のような平和教育はなく、復興に追われ、毎日の生活で精いっぱいでしたし、わざわざ学校で学ぶというよりも、家に帰れば誰かが病に伏せていたり、直

接にではなくても原爆の影響で結婚がとりやめになったり、そういう話はよく耳にしました。

私はその後進学のために上京しましたが、原爆の状況を知らない人が多く、広島への原爆投下が8月6日であること、長崎への原爆投下が8月9日であることすら言えない人が少なくないことに驚きました。

昨今では「戦後80年」という言葉や展示を目にする機会もありますが、そうした節目の話題ではなく、日常の感覚として原爆を「他人事」のように感じている人が多いのではないのでしょうか。

戦争を体験したことや目にしたことを言葉にするのは難しいです。自分の言葉では伝えきれないから、語る人が少ないのだと思うのです。それでも語り継ぐことには意味があります。自分なりの言葉で、方法で、伝えていかないと歴史は風化してしまいます。